

前期国語班（現代文）の活動

国語班：3年1組 小西 壮大

1. はじめに

前期国語班ではテーマを決めて自分の思いを文章化することを目標に定め、そのトレーニングとして文章力をつけるために課題をおこなった。

2. トレーニング

(1) 課題1「ことばの授業」について

読売新聞出前授業で山本記者と酒井さんに授業していただく

- ・新聞記事の書き方についてのレクチャー
- ・テーマ「自分のことを書いてみよう」



手順

- ①自分のプロフィールカードを記入
- ②3人1組になって、カードを基にして2人がインタビューしてメモをとる
- ③メモをもらって、記事を書く
- ④各自の書いた記事を相互批評し、推敲しながら記事を完成
- ⑤国語の教育実習生を交えて、各自の文章について合評する

【発見】文意の矛盾や文章のねじれ、表現不備など、他の人に読んでもらって指摘されると、自分では気づかなかったことが沢山あった。国語班4人とも推敲したあと、内容が深まり文章のレベルがぐんと上がった。

作品

題 「サッカーの魅力にひかれて」

大阪府立高津高校2年、サッカー部所属。主に守備を行う、DFとして毎日の部活動で練習に励む。学校内での練習のみでなく、自宅での体幹トレーニングや腹筋といった筋力トレーニングも行う。また、日々の練習メニューや反省点を記したサッカーノートも書いている。観戦を好み、TV中継の他にもスタジアムまで足を運ぶほどである。

小学校1年生の時、小学校のサッカーチームのコーチをしている友達の父親に声をかけられ、両親に「サッカーがしたい。」と頼みこんだ。一つのボールをチームで繋いでゴールを決めるといふ、チームワークの魅力にひかれ、小学校、そして中学校ではキャプテンとして、10年以上経つ今でもサッカーを続けている。

新入生が20人以上加わり、選手層が厚くなった今年のチーム。厳しいレギュラー争いの為に、辛いランメニュー等にも耐えながら選手権大会での大阪府ベスト16を目指す。

(2) 課題2 「文章表現をみがく」

岸部一徳のイラストをみて、よく観察し細部にこだわって表現する
まず、例文、高倉 健が映画のワンシーンを観察して書いた文章を読んでコツをつかんだ。
教育実習生にも書いてもらった。

参考「書くことが思いつかない人のための文章教室」著者 近藤勝重

作品

題 「岸部一徳」を観察する

岸部一徳は、素晴らしく整った顔立ちも流行の髪型もなく、服装がとびきり洒落ているわけでもありません。鬚には白髪が目立ち、服装もシンプルなシャツのみですが、その雰囲気からは、着飾らない年を重ねた深みを感じられます。口元は口角がやや上がっていて、微笑んでいるように見えます。しかし、眼差しは冷たく、彼の表情は誰かを疎むような陰湿な感じにも、微笑ましい光景を見る清々しい顔にも見えます。

様々な感情を含む独特な表情や雰囲気が、多様な役柄をこなすための一因となって、リアルな演技を生み出しているのだと思われます。

(3) 課題3 「17才からのメッセージ」

400～600字以内でエッセイをまとめる

大阪経済大学 第12回高校生フォーラムに応募。応募総数32285作品のなかで、
銀賞(71作品)受賞

作品

題 「心の眼」

人が生活の中で手に入れる情報のほとんどは視覚によるものだと言われている。このことから、視覚は私たち人間にとって大変重要なことではあるが、目に映るものが時に大切なことを見えなくさせてしまうこともある。

それを痛感した体験があった。私が小学校に入学したばかりのことだった。いつも通り学校から帰宅し、家の近くの公園で遊んでいた時、一人のおばあさんに道を尋ねられた。おばあさんの顔には大きな青アザがあり、その容姿に私は恐怖に近い衝撃を受けた。幼いながらに差別をしてしまったのだ。道案内を頼まれた私は、道順だけ教え、案内は断ってしまった。しかし、おばあさんが「ありがとう。」と微笑んで言った時、自分の間違いに気づき、ひどく申し訳ない気持ちになった。

今でも、あの時案内してあげればよかったと思うことがある。見た目の第一印象だけで偏見を持った自分を悔やんでしまうのだ。だからこれから私は、偏見や差別のない「心の眼」を持ちたい。視覚だけではわからない、人の気持ちや思いやりに気づける「心の眼」を持てば、この世界はもっと優しい色に輝いて見えるはずだ。